第２　問題作成部会の見解

１　出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

○　英語以外の外国語については，大学入試センター試験の枠組みを受け継いだ『筆記』テストを課し，「リスニング」テストは実施しない。

○　教科としての外国語科の目標である「外国語を通じて，言語や文化に対する理解を深め，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り，情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う」に基づき問題作成を行う。

　また，実際のコミュニケーションを想定した明確な目的や場面，状況の設定を重視する。

○　問題作成に当たっては，CEFR等を踏まえた力を問うことをねらいとして作成する。

　その際，大学教育の基礎力を踏まえ，また，高等学校において英語以外の外国語を初めて履修する者もいることを考慮し，問題作成を行う。

２　各問題の出題意図と解答結果

共通テスト第３回である令和５年度の問題の種類と各解答数，配点の内訳を【表１】に示す。200点満点は令和４年度問題と変わらない。全体の解答数についても令和４年度と同じく50とした。

第１問は発音問題であるが，Ｄに関しては，ピンインによる出題をリスニング問題の代替とする観点に基づき，ピンインによる会話問題を出題している。第２問は，語彙の適切な使い方を問う問題で，令和４年度問題と同様である。第３問も，令和４年度問題と同様の形式である。第４問は，共通テスト第１回から特に充実させた形式で，コミュニケーション能力を読み取り測定する問題である。中問Ａでは，会話・表・日記から情報を読み取った上で適切な選択肢を選ばせ，コミュニケーションにおける情報の受信力を測定できる問題とした。中問Ｂでは，会話・企画案から情報を読み取り，それらを総合して発信することを想定して，適切な選択肢を選ばせ，コミュニケーションにおける情報の発信力を測定できる問題とした。第５問は長文問題で，長文読解力全般を測る問題としている。

【表１】

問題の種類	発音・ピンイン	語　句	表現理解力	コミュニケーション力	長文読解
問題番号	第１問	第２問	第３問	第４問	第５問
解答数	9	8	10	12	11
配　点	36点	32点	28点	52点	52点

第１問：発音の基礎及び正確さを確認する問題，正確なピンイン把握によるコミュニケーション力を確認する問題である。

　音節の３つの要素（声母，韻母，声調）について問う出題及び正確なピンインの把握によるコミュニケーション力を問う出題となっている。中問ＡからＤにわたって，日本の高等学校で初めて中国語を学ぶ生徒の語彙の習得範囲を考慮し，基本的な単語から出題した。高等学校教科担当教員（以下「教科担当教員」という。）からは，提示されている語がみな重要語であり，適切であるとの評価を得た一方，一部にやや難解な語彙があったとの意見もあった。

　Ｄについては昨年と同様，会話文，選択肢をピンインで出題した。中国語表記の補助手段としてピンインによる表記法を用いることは，中国語の４技能をバランスよく習得するために必要な手段であり，日本の高等学校における中国語教育では極めて重要である。教科担当教員からは，会話文，選択肢共に難解な語句はなく，ピンイン学習を重視する出題であるとして，

評価を受けている。

A：声母に関する知識を問うもので，[1]は“q”と“x”の区別，[2]は有気音“zh”と無気音“ch”の区別を問うもので，正確な発音の習得と知識が求められる。

B：韻母に関する知識を問うもので，[3]は“-ang”，“-an”と“-ong”の区別，[4]は“-üe”と-ie”の区別を問うた。

C：声調に関する知識を問う問題で，二音節語における声調の組合せを問うており，５つの二音節語，即ち10の音節に関して正確に把握していなければ正解は導けない。中国語を学ぶ初学者にとっては習得に苦労するポイントであると同時に，相当中国語に習熟した者でも正確な知識を欠くことがある。

D：ピンインの会話文によるコミュニケーション力を問う問題で，会話の流れを理解して解答する必要がある。

第２問：語彙力・表現力を測る問題である。

Aは文の一部をブランクとし，適切な語を選ばせる問題で，単語の意味・用法に対する正確な知識を問う問題である。併せて類義語の区別も問うた。教科担当教員からは，類義語の知識が要求され，選択肢も重要語であり，ほぼ適切な問題であるとの評価を受けたが，問１については少し容易であったように思われるとの指摘があった。

BはAと同様に，語の意味・用法に対する正確な知識を問う問題である。適当でないものを選ばせることで難易度を上げている。教科担当教員からは，選択肢がいずれも難解な語ではないが，重要語であると評価されている。

Cは，100～120字ほどの短文を読み，文脈に従って適切な語を選択させることによって，文脈に応じた語彙を選択する力を確認するものである。教科担当教員からは，文章理解や文脈を複合的に考えさせる良問であるとの評価を受けた。

第３問：作文能力及びコミュニケーション力を測る問題である。

和文中訳及び中文和訳を通して，中国語の表現力，理解力を測る問題である。

A：日本語の文を読み，与えられた語句を正しく並べて対応する中国語の文を作る，和文中訳の設問である。８つの選択肢から必要な４つを選ぶ。教科担当教員からは，選択肢の語句はいずれも重要語の範囲で，語句の用法や文法の理解を確認する適切な問題であるとの評価を得た。

B：和文中訳問題で，選択肢の中国語はピンインで表記してあり，日本語の日常的な表現に対応する中国語の運用能力を測ろうとするものである。問１，問２共に日本語の表現を的確に理解した上で，ピンインで示された中国語の選択肢の全てを，それぞれ最後まで読み解かなければ正解が導けないように工夫した。教科担当教員からは，問１は良問であると評価された。

C：中文和訳で，問題文の中国語はピンインで表記してある。選択肢の日本語文を最後まで読み解かなければ正解できないように工夫した点は，上記Bと同様である。教科担当教員からは，適切な設問であるとの評価を得た。

第４問：大学で時間割を組んだり，国際交流事業協力をするなどの実際のコミュニケーションの場を具体的に設定して，身近な話題に関する資料から，必要な情報を読み取り，複数の情報を比較・判断して要点をつかむ力を問う問題である。言語情報処理的観点から必要な内容を整理・統合して正しい解答を得るようにしている。中問Aでは情報を受信する場面における中国語運用能力，中問Bでは情報を発信する場面における中国語運用能力を問う。

現実の生活に即した素材からの出題であるため，従来出題には使われなかった語彙もこの

第４問に限り取り入れている。ただし，受験者にとって難度が高い語彙は避け，正答を導くのに必要な情報は適切な語彙レベルを維持するよう配慮した。また，表などを使って情報をスムーズに伝える工夫をしており，ここでそれらを用いるのは，そのような現実の生活の面における中国語の運用能力を問うことを主眼とするためである。

Ａは大学での履修科目を決定し，実際に一週間の授業に出たという設定になっている。授業の候補を示した表と会話，日記などから適切な情報を受信する能力を測る問題である。問１は，文章から，何を履修しようとしているかを的確につかみ，一致するものを選ぶ問題である。問２は，授業候補を示した時間割と会話文から情報を読み取り，空欄を埋める問題である。問３は，大学生の日記とそれまでの情報を踏まえて，時間割を推測する問題である。様々な情報を得て，それらを処理し，適切な解答にたどり着く能力を測っている。教科担当教員からは，高校生にはややなじみの薄い題材であり，題材設定に考慮が必要という意見があったが，設問そのものは適切であるとの評価を得た。

Ｂは，国際交流クラブで，中国の市との友好を記念するイベントで，イベントの企画書を作成する，という設定である。会話文や企画のカードなどから適切な情報を受信した上で，それらの情報に基づいて作成された企画書の内容を問う問題である。問１は，学生の会話と一致するものを選ぶという問題である。問２は，学生たちが提出したイベント企画に基づいて，その内容に合致する内容を選ばせる問題である。問３は，Ｒ市の意見を踏まえ，最終的にまとめた企画書について，その内容に合致する中国語の文を選ばせる問題である。

教科担当教員からは，適切な設問であるとの評価を受ける一方，注釈を付けてほしい単語がある，６箇所の空欄に７つの選択肢が提示されていたり，問３を解くときに問２の資料を見比べる必要があるなど，時間と手間がかかってしまうという指摘を受けた。

第５問：長文読解力を測ることを主たるねらいとしている。

今年度は小説文から選んだ。長文の分量は，長文問題としての適切な情報量に考慮して，昨年度共通テストの第５問と同じく900字強である。問題文は，使用語句，表現などにも留意しながら，共通テストにふさわしい内容に書き換えている。素材や書き換えなどについても，教科担当教員から毎年提出されている要望を反映するよう努めている。

問題文は，協力して商いをする兄弟についての物語である。二人の関係が，はじめは協力関係にあったのが，勘定台の上のお金が無くなったことを機に，仲たがいしてしまう。そのお金は実は通りすがりの者が借りていったのであり，何年も後に返しにくる。そこで真相を知った兄弟は和解したという内容の読解問題である。問１，問５，問８は，空欄に入れるのに最も適する語を選ぶ問題である。問２，問６，問７は下線部の表す意味を選ぶものである。問３，問４，問９は文脈から判断して空欄に入れるのに適切な文を選ぶものである。問10は，従来どおり，問題文全体の内容に合致する選択肢を選ぶ問題であった。

教科担当教員からは，本試験と比べ，文章がやや簡単であり，設問の対象が単純であったり（問２），選択肢が短く易しい（問10）といった指摘もあったが，全体として適切な問題であるとの評価を得た。

３　まとめと今後の課題

中国語は他の外国語と比べ平均点が高い傾向にあるが，中国語の受験者層の特性を考慮すれば，いたずらに平均点に惑わされることなく，高等学校の学習で到達した学力を正しく評価できる試験であるべきと思われる。教科担当教員からも，高等学校からの学習者が対応できるような出題を強く要望されている。本部会の問題作成の方向性が平均点によって揺らぐことは，学習者にと

って望ましくないと思われる。

今年度の受験者は合計741人であった。これは，昨年の605人から36人の増加である。近年，受験者数は，若干の減少傾向にあったが，高等学校において中国語教育が着実に定着したことの証左と見ることができよう。来年度以降も，共通テストの目的に則して，基礎的な学力を身に付けた受験者が報われるような問題作成を心がけていきたい。

共通テスト３回目の結果として見た場合，語学の本来の意義である読解力の測定に加え，リスニングの課せられない外国語として，より効果的なコミュニケーション力の測定方法を更に探求し，高等学校における言語教育及び言語活動の充実に応えられるよう努めたい。

今年度も教科担当教員の方々をはじめ各方面から有益な意見を頂いたことに，深く感謝したい。

こうした意見を参考にしながら，「高等学校における学習の成果が総合的・客観的に判断できる問題」の作成を通じて中国語教育の発展と充実に寄与していく所存である。